

河原田遺跡発掘調査の記録 I

栞 原 将 人

1. はじめに

目的 戦後間もない時期から1960年代にかけて、愛知大学は精力的に遺跡の発掘調査を実施した。その成果は、『愛知大学文学論叢』や『愛知大学総合郷土研究所紀要』などで公表されているだけでなく、現在、愛知大学総合郷土研究所（以下「郷土研」と略記）が収蔵・保管している数多くの考古資料にも反映されている。しかし、その中には、調査報告が未刊行で、研究者や学生が自由に活用できない状態にある資料も多い。本稿で取り上げる河原田遺跡もその一つである。

本稿の目的は、河原田遺跡の発掘調査の概要を報告することにある。この発掘調査は1965年（昭和40年）に実施されたから、やがて半世紀が経とうとしている。いささか時を経た報告となるため、調査過程を詳しく追認することは困難だ。ゆえに、きわめて簡単な概報になるが、調査機関としての愛知大学の責務の一端を本稿で果たしたい。

整理作業の体制 かねてから資料整理の希望を抱いていた筆者らは、2011年（平成23年）3月に至って、河原田遺跡発掘調査資料の整理作業チームを郷土研内に立ち上げた。井口喜晴氏の参加を得たことがその契機である。井口氏は河原田遺跡の発掘調査を実見されているし、1970年（昭和45年）から1974年（昭和49年）にかけて愛知大学の助手や

講師を務められていた。当時の様々な事柄についてよくご存知である。

翌月に年度が改まると、郷土研事務局からも有能な人材支援や、多少の予算投下といった援助を得ることができた。このような時宜を得て、次の体制で整理作業を開始した。

神谷 智（所員）

玉井 力（非常勤所員）

井口喜晴（非常勤所員）

栞原将人（研究員）※本稿執筆担当者

森田亮子（考古資料担当臨時職員）

朝倉留美（考古資料担当臨時職員）

整理作業の方法 作業を始めたのは2011年（平成23年）4月12日からである。週2日程度のペースで行っており、今日まで継続して実施中だ。作業の開始段階においては、まず現状の把握に努めた。保管されている出土遺物の総量や保存状況の確認である。その後、調査記録との照合、遺物の復元・実測・写真撮影、図面の編集・トレースなど、概報を刊行するための作業を実施している。

各調査区の名称や、土器棺の番号、土層番号などは現地調査の時点で与えられたものを踏襲している。調査記録と照合する際の便宜を考慮して、変更は慎むべきと考えた。

本稿で用いる方位は、現地調査で用いられた方位磁針の示す磁北である。本稿で扱う土器棺の出土状態図は縮尺12分の1に、遺物実測図の縮尺は4分の1に統一している。

2. 資料の伝存状況

河原田遺跡の出土遺物は、郷土研の展示室に陳列されている資料群のみならず、別棟の第二研究棟、そして「SHOWER ROOM」と表札のかかる古い木造倉庫⁽¹⁾に分蔵されていた。

第二研究棟の遺物群は、コンテナケースに収納されて整然と積み上げられており、これまでに複数回の移動・再収納が繰り返されてきたことを物語っていた。

一方、「SHOWER ROOM」は、開かずの間となっていた場所である。ここには思いがけない膨大な量の遺物がダンボール箱に収納されて眠っていた。うず高く積み上げられたダンボール箱の上を崩れ落ちた天井の碎片や土埃が分厚く覆っている有様だった。古くて腐ったダンボール箱は持ち上げることすらままならなかった。この状態を見れば、この遺物群が長期間この場所に放置されていたことは明白だった。

3か所に分蔵されていた遺物を一つ所に集め直し、はじめて遺物の全体を目の当たりにした時、筆者らはあらためて報告書未刊のままだに過ぎ去った時間の長さを実感した。

気を取り直して出土遺物を通覧してみると、そこには調査当時に行なわれた整理作業の形跡を認めることができた。

遺物は、洗浄・注記作業を終えていたが、出土量が膨大だったためか、細片は注記の対象から除外され、出土地点ごとにダンボール箱あるいはビニール袋に一括収納されていた。注記はペンキによる筆書きで「KW」と記されていた。収納単位となっている箱や袋にもマジックペンや鉛筆で出土地点を示す注記が記されていたが、中には無注記のものもあった。

一部の資料は接合や復元が施されていた。現地調査の遺物取り上げ段階で同一個体と認識し得たものが対象だったようだ。

遺物出土状態図や土層断面図などの図面類は、丸めて図面筒などに入れられていた。広げてみると、図面はロールの方眼紙を裁断して使用したものらしく、それぞれ大きさが異なっていた。また、方眼紙には、平板や画板に張り付けた際の折り癖や泥汚れなどがついていることから、いずれも現地調査の際に作成された原図であることを確認できた。

3. 河原田遺跡をめぐる環境

河原田遺跡は、愛知県豊川市御津町上佐脇河原田に所在する。調査当時の同地の呼び名は、愛知県宝飯郡御津町大字上佐脇字河原田だった。音羽川下流域の沖積平野に位置し、周辺の標高は約8mを測る。現在ここは、耕地整理の波に洗われて、沖積平野特有の自然堤防や低湿地など、かつての微地形が失われている。しかし、古い地籍図や耕地整理前の航空写真を見ると、同地には南北方向に細長く延びる旧河道（氾濫原）の痕跡を明瞭に認めることができる。これは音羽川の旧流路といわれるもので、現在は小支流安藤川が流れている。河原田遺跡はこの旧河道に面した低位段丘上に立地する。「河原田」という遺跡の名称は、この旧河道の湿地帯に由来する字名による。

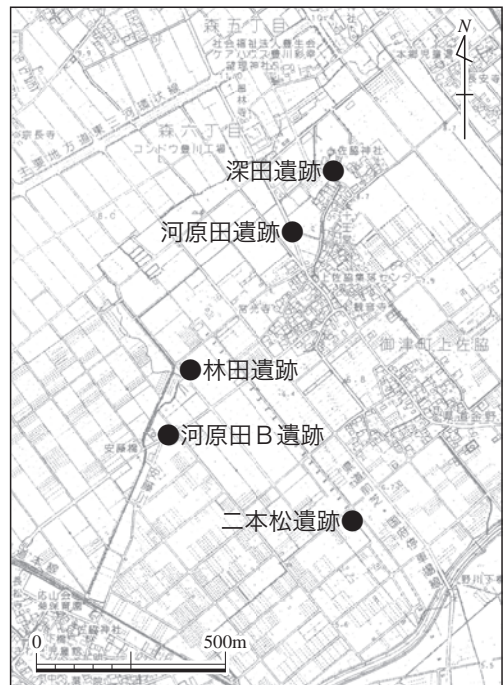
同地の地質区分図に周辺の弥生遺跡の分布を重ねてみると、河原田遺跡・深田遺跡・林田遺跡・河原田B遺跡は、旧河道に面した微高地上に占地するという共通した立地の特徴が復元できる（第3図）。これらの弥生遺跡の存在から、河原田遺跡とその周辺は居住域として十分に利用できる環境にあったと考えられる。弥生時代においても比較的安定した微高地が展開し、その西側には川沿いの低湿地が隣接する環境だったのだろう。こうした湿地が水田（湿田）として利用されていたことは想像に難くない。

これらの遺跡は、至近距離に並ぶ位置関係

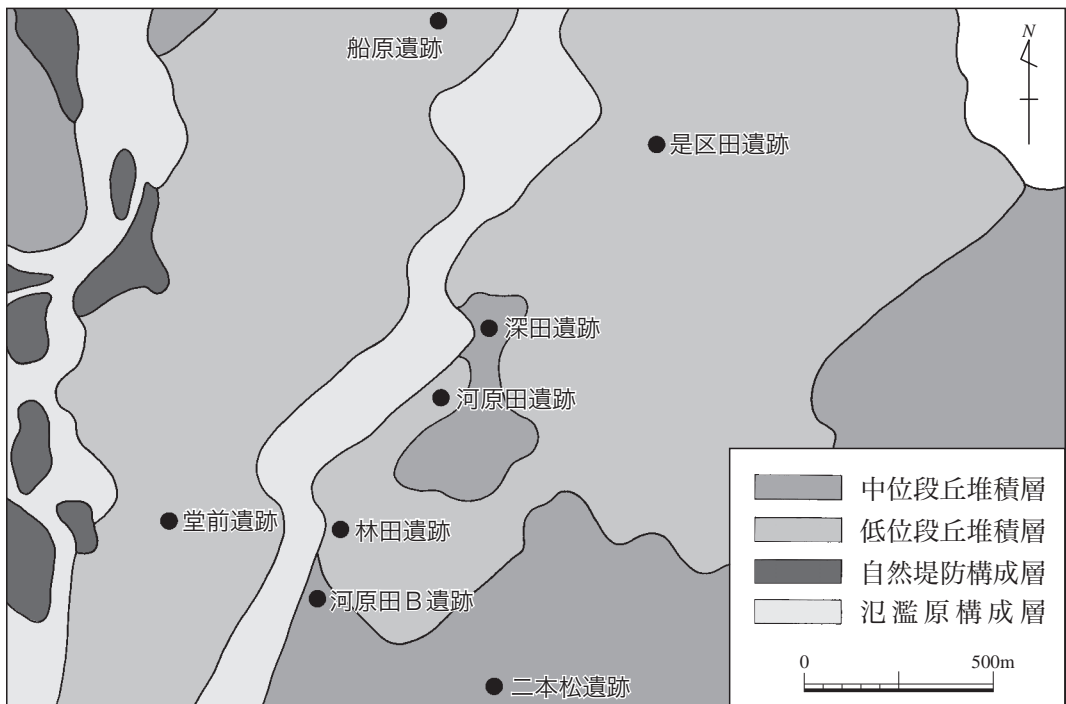
から、それぞれを個別の遺跡として捉えるより、有機的に連動した一連の遺跡群と考えるのが妥当である。



第1図 河原田遺跡の位置
北緯34度49分5.298秒
東経137度19分59.56秒



第2図 周辺の遺跡分布 (S = 1/20,000)



第3図 周辺の地形・地質区分 (S = 1/20,000)

新編豊川市史編集委員会 (1998) 『新編豊川市史 第十巻 自然』の付図「豊川市地質図」を援用して作成

4. 現地調査に至った経緯

愛知大学が河原田遺跡の発掘調査を実施したのは1965年（昭和40年）11月のことである。「御津町が土地改良事業に着手することになり、事前調査のため同町の要請で愛大歴史研究室が中心となって同大の学生四十五人が参加して大がかりな発掘調査をしている」と当時の新聞が記している⁽²⁾。簡潔な記事だが経緯も分かるし臨場感もある。これが一番分かりやすい。

調査を指導したのは、大参義一氏と歌川学氏である。大参氏は当時名古屋大学の助手で、愛知大学に講師として招かれていた。歌川氏は当時愛知大学の助教授だった。

調査開始にあたって取られた事務手続きを第1表に示す。ここで注目したいのは埋蔵文化財発掘届である。この届出には「埋蔵物処置に関しての希望」という項目があるからだ。その項には、出土後の遺物の取り扱いについて、「一括して愛知大学文学部歴史学研究室において保管したい」との要望が記されている。現在、郷土研が河原田遺跡の出土遺物を保管しているのは、歌川氏のこの望みが叶えられた結果だろう。歌川氏は1976年（昭和51年）4月から1983年（昭和58年）12月まで郷土研の所長も務められた。

5. 調査の方法と経過

調査区の設定 埋蔵文化財発掘届には、「発掘しようとする土地の所在」として「愛知県宝飯郡御津町大字上佐脇字河原田8、

9、31、32、33、34、35、37、39番地」が記されている。だが、このうち実際に調査区が設定されたことを確認できるのは、字河原田31-1、32-2、32-4、33-1、33-2、34-1、35-1、35-2、39-1、39-3である⁽³⁾。この土地を地籍図上で示せば第4図の網掛け部分（発掘調査対象地）となる。周囲はみな水田で、ここだけが畑となっている。同地は周囲より1mほど小高く、さながら浮島のようなだった。大参氏はこの景観を「島畑状にのっている遺跡」と表現している⁽⁴⁾。

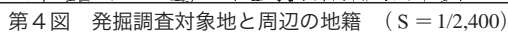
発掘はトレンチによる部分調査で、調査区は土地の形状から4か所に分けて設けられた。その配置を第5図に示す。トレンチの設定にあたり便宜的な基準となったのは、県道から南東方向に入る枝小道だったと推測できる。調査初日に設けられた1～4トレンチの軸方向が、この枝小道と平行ないし直交する配置となっているからだ。調査3日目には5～7トレンチが追加されたが、1～4トレンチとは異なる軸設定となっている。トレンチは、延長距離に差はあるものの、いずれも幅は2mに設定された。

トレンチを拡げる形で設けられた調査区もあり、拡張区と呼ばれた。1・2トレンチにはA拡張区が、3・4トレンチにはB拡張区が、5・6トレンチにはC拡張区が、7トレンチにはD拡張区が追加設定された。

なお、第5図の調査区配置図は、平板測量により縮尺200分の1で作成されたものである。今ここで、この測量図に国家座標を与えることは不可能で、当時の調査区の位置を厳密に求めることは難しい。しかし、当時の発

第1表 事務処理手続の経過

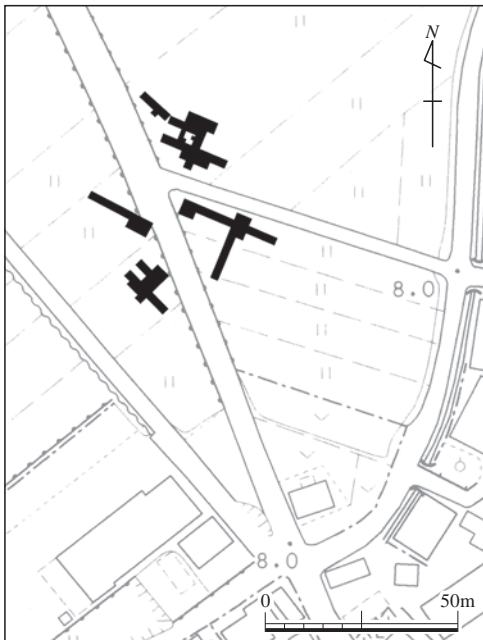
日付	件名	差出人→受取人
昭和40年9月20日	埋蔵文化財発掘届	愛知大学文学部歴史学研究室 → 文化財保護委員会
昭和40年9月30日	埋蔵文化財発掘に関する副申	御津町長 → 愛知県教育委員会
昭和40年9月30日	発掘の承諾書	土地所有者 → 愛知大学文学部歴史学研究室



— 215 —



第5図 調査区の配置と周辺の地形 (S = 1/500)



第6図 復元した調査区の位置 (S = 1/2,000)

掘の概要を把握するためには、多少の誤差を捨象することは許されよう。敢えて一步踏み込んで、当時の調査区を現況の地図上に比定してみたい。作業の結果を第6図に示す。

発掘調査の経過 発掘調査に参加していた学生らは、「発掘中、毎日ニュースを出すことに決定」した⁽⁵⁾。発掘現場に謄写版を持ち込んで、速報を出していたのだ。井口喜晴氏によれば、この手法は昭和40年代の愛知大学ではよく行なわれていたという。

調査から半年が経過した1966年(昭和41年)の5月、学生らは『高師考古』の第1号を発刊した。愛知大学考古学研究会の会報である。広く世間一般には出されていないが、この中に河原田遺跡の発掘調査日誌が収録されている⁽⁶⁾。発掘現場で毎日出していたニュースを手ずからまとめたのだろう。この日誌には毎日の調査の様子や経過などが記録されている。調査から約半世紀が経過した現在において、河原田遺跡の発掘調査に関する最も基本的な資料の一つであると同時に、当時の発掘調査の雰囲気を伝える貴重な記録でもある。

る。その重要性に鑑み、ここに全文を掲載しておく。なお、読み易さを考慮して、日誌の原文にない句読点や括弧、計測値の単位などを加えた箇所がある。

11月15日(月) 晴

10:30作業開始。試掘溝を設け、層位、遺物出土状態を見る。層位は表土下に3層。遺物は第1層が最も多い。即、表土(耕作土)、第1層暗褐色、第2層暗黄色、第3層黄色。これを標となす。午後1時より各トレンチ(第1T～第4T)の発掘にかゝる。トレンチは、第1T(2×26m)、第2T(2×14m)でT字形に設定。第3T(2×18m)、第4T(2×12m)十字形に設定し、第2・4Tは北東より1区とし、又第1・3Tは西北より1区とした。尚、1区は2×2m。発掘中、毎日ニュースを出すことに決定。

11月16日(火) くもり時々雨

8:30作業開始。第1T耕作土・第1層の間から銅銭「朝鮮通宝」出土。同Tよりカメ棺(8区)。周辺に土器片多数。各Tとも第1層に入り出土物多数。1・4T第1層上面にて石鏃各1点。作業終了4:30。

11月17日(水) 晴、強風

今日、第5・6・7Tを設ける。第2Tはセクションをとり、一応の発掘を終る。第1T7・8・9区のカメ棺は7区より1～3号とした。各Tより石器・土器片多数出土。本遺跡の時代は一定せず従って広範囲に亘る遺物が出る。尚、第5Tは2×14m。第6Tは2×8m。第7Tは2×18mで、各Tとも拡張区を設ける。

11月18日(木) 晴

依然第1層を発掘中。第5T1層に土器片多数。内耳を特徴とし、4T拡よりチャート製コア。1区にて石積様の所から切子玉1。4区-36cmにてチャート製石小

刀。第7 Tは北方に傾斜をもつ層で、後日その延長をボーリングする。5時終了。

11月19日(金) くもり時々雨
各Tとも第2層に入り出土物少なし。第6 Tに瓜郷式土器のツボ棺出土。第5・第6 Tにカメ棺。第5 Tに貝の小ブロックがあり、アサリ・赤貝が主である。深度は25cm。第1 Tに土器片・石斧。第3 T 3区-45cmで中形ツボ。雨のため3時に作業終了。宿舎にて出土遺物の整理を行なった。7時よりミーティング。上佐協の古文書を読ませていただいた。

11月20日(土) 雨時々くもり
第1 T拡張A3より黒燐石1点。第3 T B8より緑泥片岩製の打製石斧1点。同T 3区より高さ約50cm程の完形ツボをとり出す。第7 Tに於てほとんど形を残さぬカメ棺出土。各T及び拡張区では、実測と断面の作図にかかって雨をうらむ。

11月21日(日) くもり
第1 Tの3号カメ棺の実測を終り、とりあげたところ、中より更に小形のカメが表われる。第7 T東南の175cm位の深さから、又8～9区では50cmから木片(炭化している)が出てくる。各Tとも実測に懸命。

11月22日(月) 晴
新聞社が来たり、見学人が非常に多い1日。B区拡張に多くの土器片が出土。実測も終らず10人程残ってあとは帰る。作業終了6時。明日のためエイ気を養い、コンパをひらく。

11月23日(火) くもり時々雨
作業終了7時。カメ・ツボ棺の実測終り、とり上げる。尚、この遺跡は広く、全て掘り上げられなかったのも、御津中学校の御助力でこの後1週間程発掘を続けた。出土遺物は、緑泥片岩製石包丁・カメ棺・高杯破片・ツボ不完形品である。こうして当時の日誌を読んでもみると、発掘現場の臨場感が伝わってくる。発掘調査は

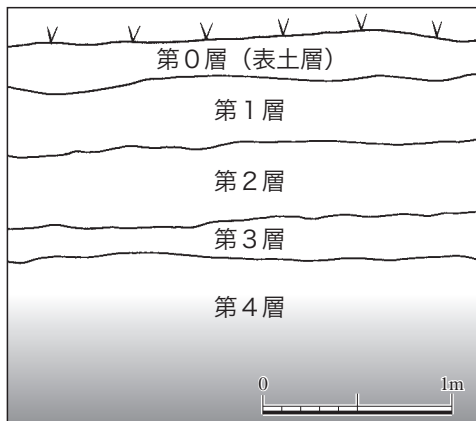
1965年(昭和40年)11月15日から同年11月23日まで行なわれた。調査が佳境を迎えた11月22日には報道公開の機会にも恵まれ、多くの見学者を受け入れた⁽⁷⁾。記述中に出てくる「宿舎」とは発掘現場近くの常光寺のことである。学生らは同寺に寝泊まりして調査に従事していた。発掘調査と合宿生活の実施にあたっては地域住民の支援があったことは想像に難くない。愛知大学による河原田遺跡の発掘調査は、今の言葉でいうところの市民協働的な調査であったと言える。

6. 調査成果の概要

基本層序 層序を把握する上で必須となる土層断面図は、トレンチ長軸の壁面を基本として複数のトレンチで記録化が行なわれたようだ。しかし、今に残されている図面を見ると、それらが作成途中のものばかりであることに気付く。土色の記述についても、明らかに同一層でありながら、記録者の相違により、やや異なる土色が記入されている場合がある。調査が短期間で終了したため、図面の仕上げを断念せざるを得なかったのだろう。時間的にも費用的にも十分ではない中での調査だった。基本層序を把握し得たというだけでも当座の目的は果たせたと言える。

また、これらの図面上では標高を確認することができない。このことから、土層断面図は任意の基点を用いて設定した水糸などによって作成されたものと推測できる。

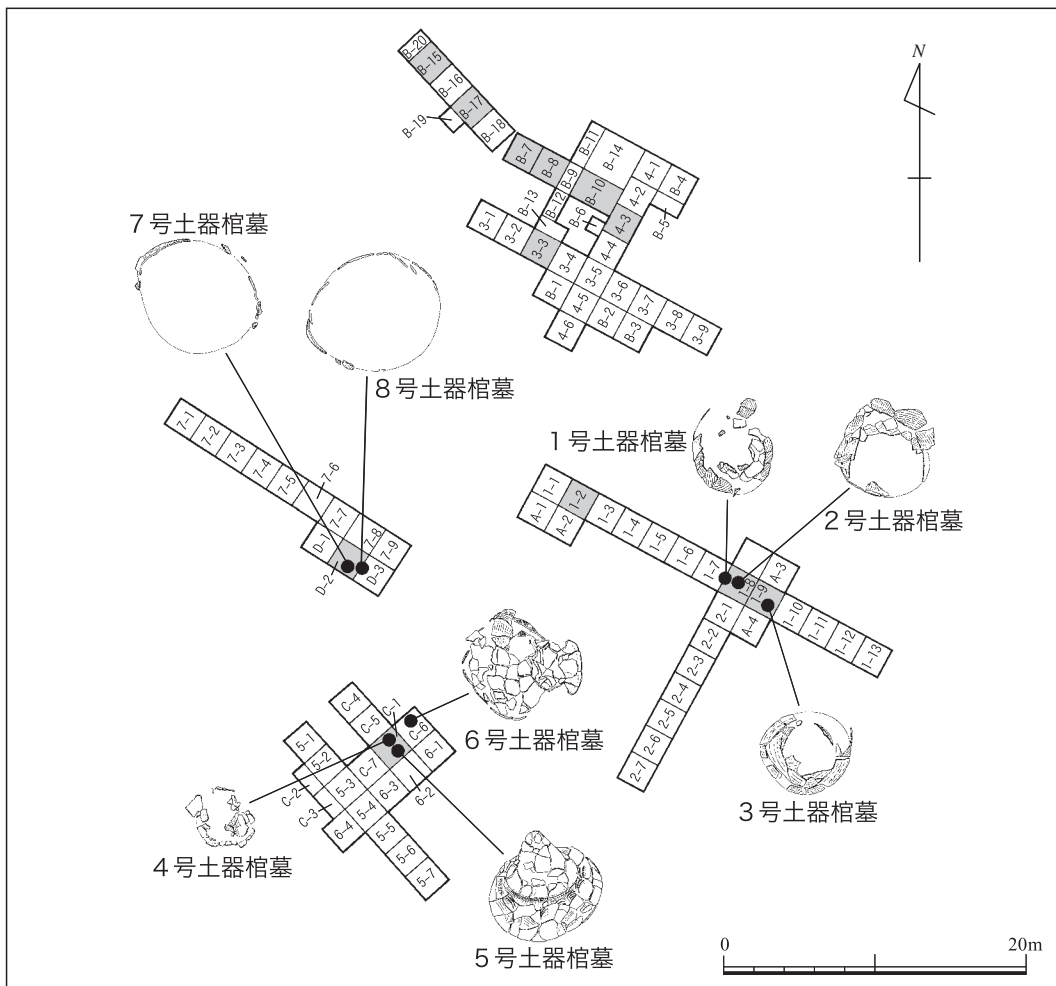
河原田遺跡における基本層位を第7図に示す。同遺跡においては、層の厚薄はあるものの、ほぼ全面において5層の基本層序が記録されている。すなわち、地表から第0層(表土)、第1層(斑鉄を含む褐灰色シルト)、第2層(暗褐色シルト～茶褐色粘質土)、第3層(黄褐色粘質土)、第4層(黄色粘質土)である。第1層には「土器片多数」だとかそれと同意の書き込みが複数のトレンチで認め



第7図 基本層序 (S = 1/40)

られる。多くの遺物を包含していたようだ。土器棺墓には第2層まで掘り込んで築かれていたものもあった。第3層と第4層は、色調により細分されているが、第3層以下が基盤層と考えて差し障りないだろう。

検出遺構 掘り方が検出された遺構はない。土色のコントラストが不明瞭で、埋土が判然としなかったためと思われる。遺構として唯一確認されたのは土器棺墓であるが、いずれも墓坑の掘り方を検出するには及んでいない。土器棺の出土に注意を払っても埋土の識別が困難だったことが窺える。



第8図 土器棺墓および遺物集中域の分布 (S = 1/500)

※土器棺の出土状態はS = 1/40で表示。

出土遺物 出土遺物の取り上げは、調査区全域にわたって設けられたグリッドごとに行なわれた。グリッドは2m方眼を基本としていたが、不定形なものもあった。トレンチ内のグリッド割りは第8図に示すとおりである。

出土遺物の総重量はおよそ670kgに及び、その主体は弥生時代前期末～中期の土器である。記録では石庖丁等の石器も出土したとされるが、現在のところ郷土研では石器の保管は確認できていない。

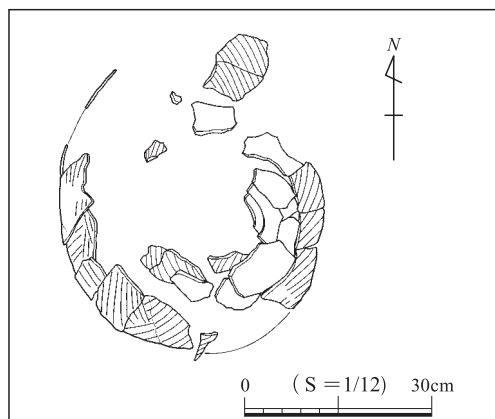
以下、現地調査において主眼がおかれた土器棺墓に焦点を合わせて、調査成果の概要を示しておこう。

土器棺墓 前出の第8図に出土地点を示しているように、現地調査の時点で認定された土器棺墓の総数は8基である。土器棺墓の認定基準は不明だが、出土状況から判断したと思われる。なかには土器棺とすることを躊躇したくなる土器もあるが、ここでは調査段階の判断を尊重して、すべてを土器棺として扱う。これらの中には、『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』（以下、『県史』と略記）において実測図が提示されているものがある⁽⁸⁾。今回はその不足分を追加実測するとともに、8基すべての土器棺墓について、出土状態図や写真を交えて紹介する。

なお、第8図中の網掛け部分は出土遺物の分量が10kgを超えるグリッドだ。このような遺物集中区域の存在は、他にも土器棺墓があった可能性を示唆している。今後遺物整理を進めていく上で留意しておく必要がある。

1号土器棺墓 1トレンチの7区と8区に跨る位置で検出された。2号土器棺と隣り合うように並ぶ。後世の削平により土器棺墓の遺構の上部は欠損していた。出土状態を記録した図や写真を見ると、棺身の埋設は横位というより斜位の状態で、主軸方位を北北東に向けて据えられたものと推測できるが判然としない。

棺身に用いられた土器は、水神平様式～岩滑様式段階の条痕文系の壺形土器のように見



第9図 1号土器棺出土状態図



写真1 1号土器棺等出土状況

手前が1号土器棺。奥に見えるのは2号土器棺と3号土器棺。

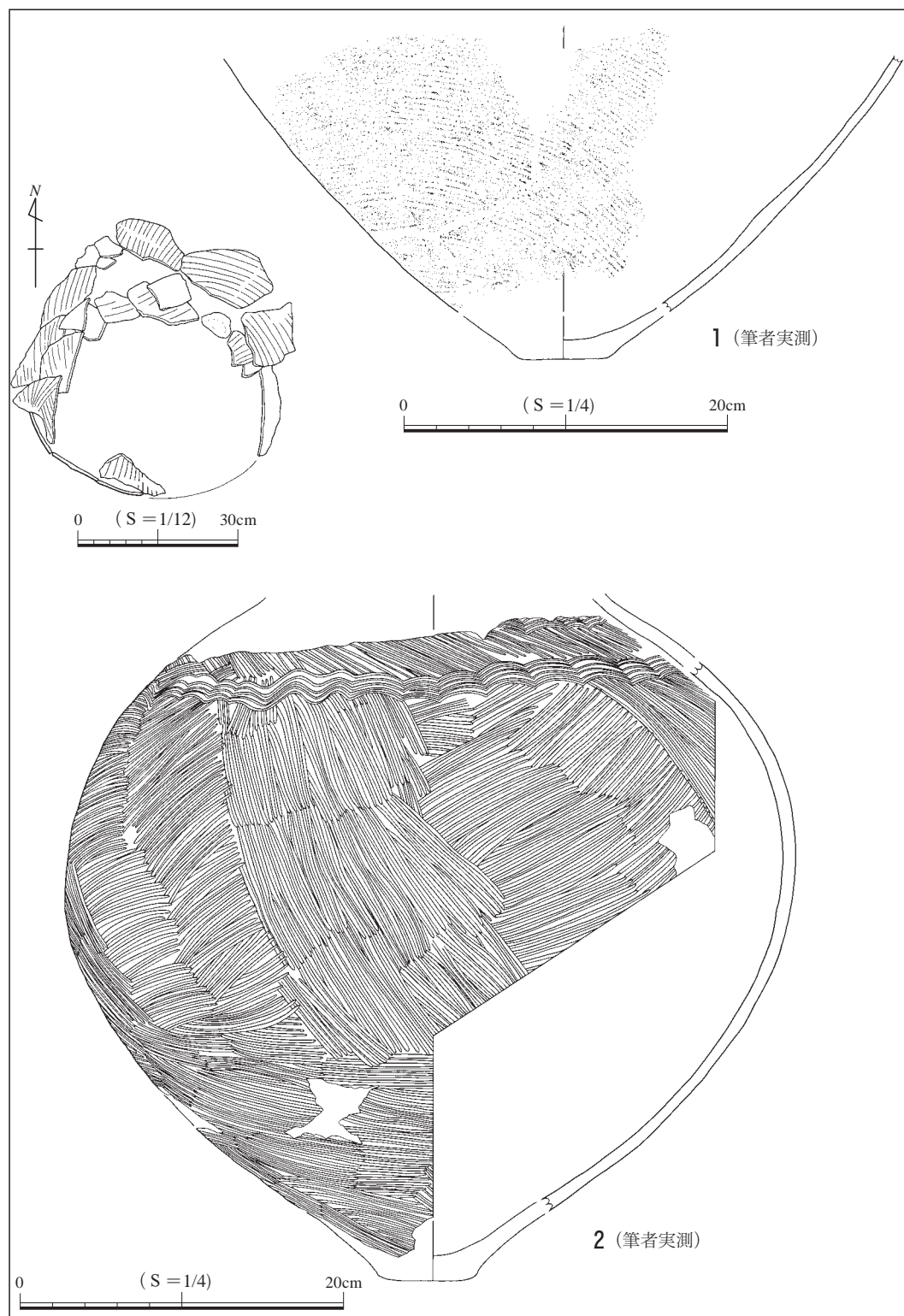


写真2 1号土器棺・2号棺出土状況

手前が1号土器棺、奥が2号土器棺。

える。しかし、現在この土器棺は所在不明で確認することができない。

2号土器棺墓 1トレンチの8区で検出された。1号土器棺に近接して並ぶ位置である。



第10図 2号土器棺出土状態図および実測図

後世の削平により土器棺墓の遺構の上部は欠損していた。土器棺の欠損状態から棺身は斜位に埋設されていたと判断できる。出土状態を記録した図や写真を見ると、主軸方位は北西を向くものと思われるが不明瞭である。

棺身に用いられた土器は、肩部を波状文で飾る壺(2)である。波状文は2条を数え、二枚貝を用いて施されている。胴部には縦方向の施文割り付け単位が認められ、縦位羽状条痕と縦条痕を交互に配す。その文様構成から、水神平様式新段階～岩滑様式段階の所産と推定される。

2号土器棺は、単独の土器棺と認識されていたが、今回筆者らが接合・復元作業を進めたところ、2個体の組み合わせであることが判明した。別個体の土器は比較的大振りな土器片で、条痕文系土器の壺の胴下半部(1)である。棺身の開口部を閉塞したのだろうか。

2と1の組合せを勘案すれば、2号土器棺墓の帰属時期は、弥生時代前期末～中期前葉に属すると推定される。

3号土器棺墓 1トレンチの9区で検出された。後世の削平により土器棺墓の遺構の上部を欠損していた。埋設状態は特徴的で、棺身となる壺(4)を立位に据え、上から逆位の甕(3)をすっぽりと覆いかぶせるように埋設していた。検出当初は3が倒立状態で置かれた単独の土器棺と認識されていたが、3の取り上げ過程で、内部から立位の4が検出されるにおよんで、2個体が組み合わさった土器棺であることが確認された。

棺蓋に用いられた甕(3)は、外面を二枚貝による斜位条痕で調整し、口縁内面および口端面には二枚貝による直線文を施す。弥生時代中期前葉の岩滑様式段階の所産と推定される。

棺身に用いられた壺(4)は、横方向の櫛描文帯3条と、その文様帯間にミガキ調整を加えるもので、尾張地域の貝田町様式の影響を受けながら、下胴部には二枚貝による条痕調

整が見られる。瓜郷様式成立直前の折衷土器と見なすことができる。

4と3の組合せを勘案すれば、3号土器棺墓の帰属時期は、弥生時代中期前葉でも新しい段階と位置付けることができる。



写真3 3号土器棺出土状況

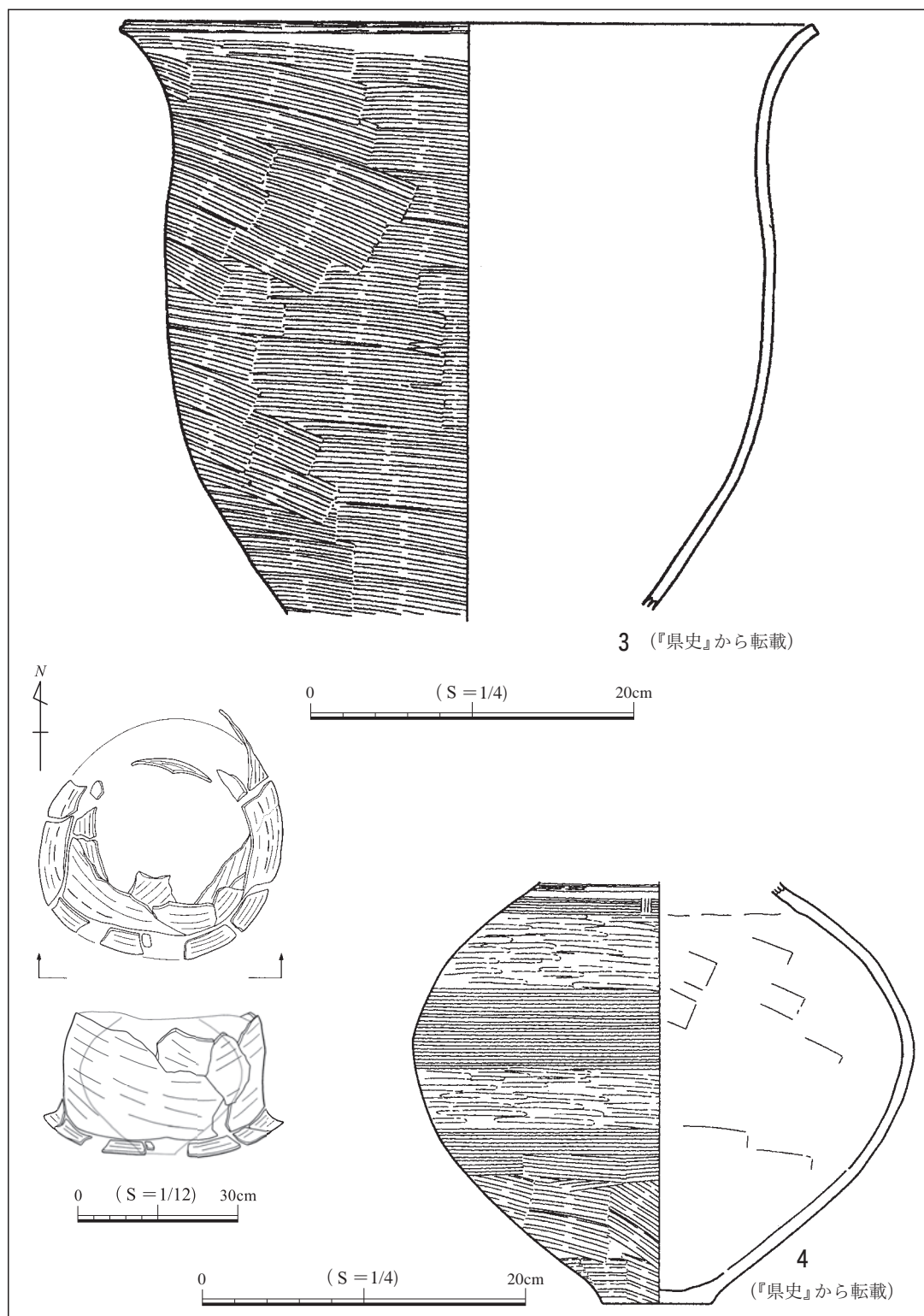


写真4 3号土器棺等出土状況

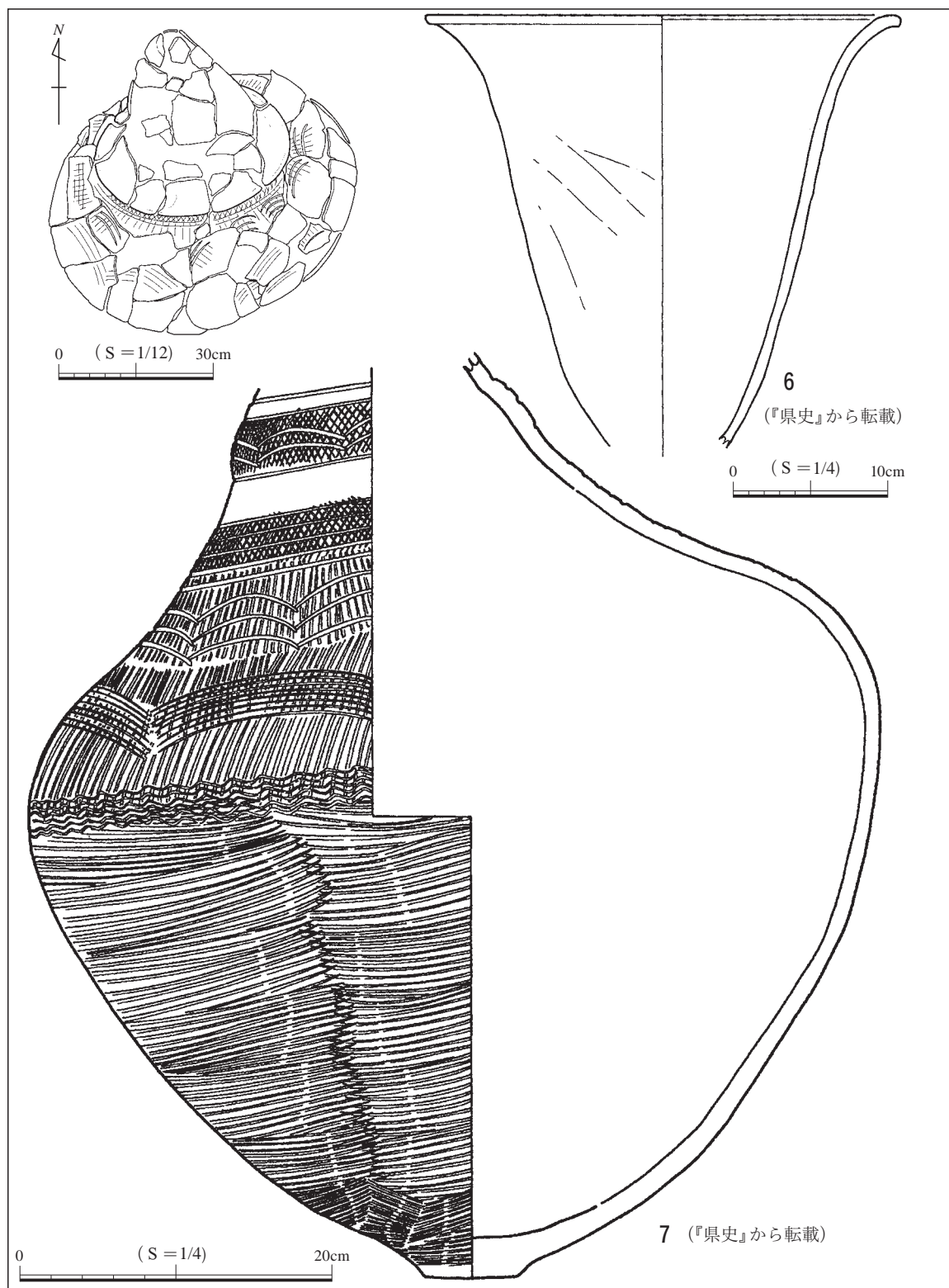
手前が3号土器棺。奥に見えるのは2号土器棺と1号土器棺。

4号土器棺墓 C拡張区(5・6トレンチの拡張区)の1区で検出された土器棺墓である。出土状態図を見ると、立位の状態で埋置されていたことがわかる。また、壺の胴部上半を打ち欠いて、その破片を蓋としていたようにも見えるが、判然としない。

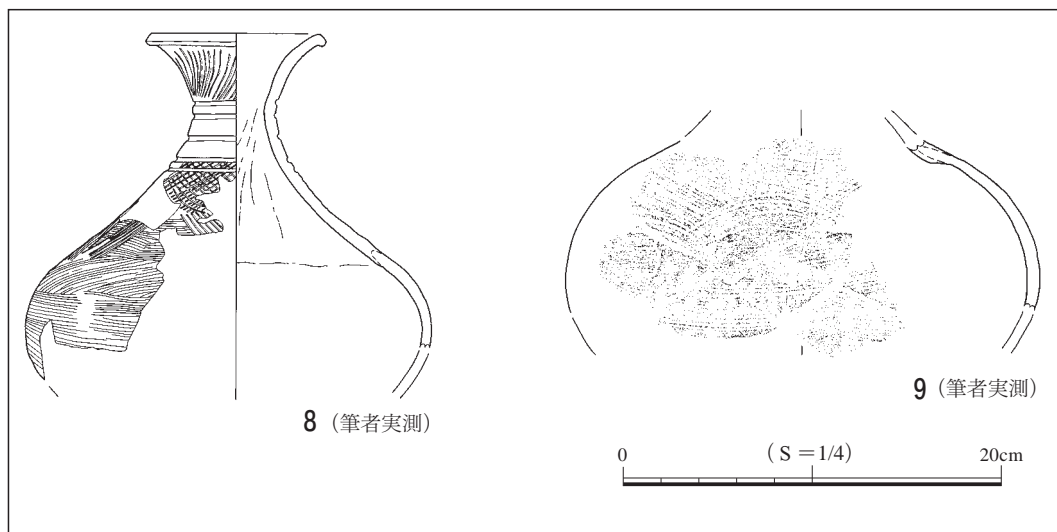
土器棺に用いられた土器は、胴下半部にミガキ調整を施す細頸壺(5)である。胴部上半を斜格子文や波状文で仕上げており、やや肩の張るプロポーションを呈する。帰属時期は古井様式新段階に求めておくのが妥当だろう。



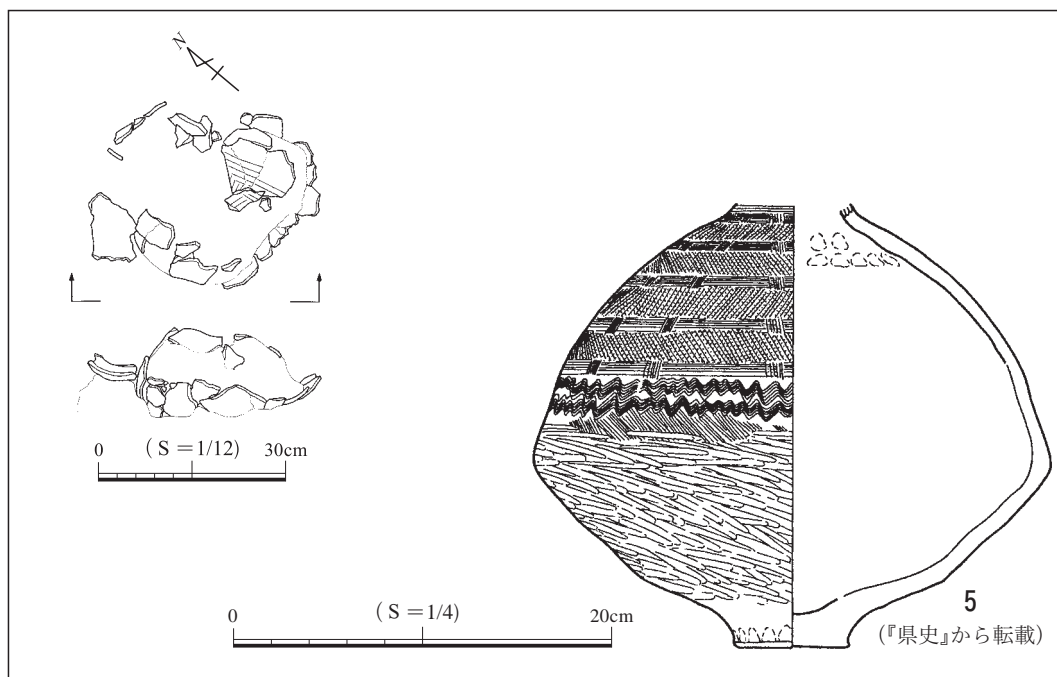
第11図 3号土器棺出土状態図および実測図



第13図 5号土器棺出土状態図および実測図



第14図 5号土器棺伴出土器実測図



第12図 4号土器棺出土状態図および実測図

5号土器棺墓 C拡張区(5・6トレンチの拡張区)の1区で検出された。他の土器棺墓に比して深く掘り込まれたのだろうか、後世の破壊が少なく、土器棺はほぼ完存していた。河原田遺跡の土器棺の中で、埋設当時の状況を最も良く残すものである。土器棺は、大型の壺(7)と甕(6)で構成される。7の頸部から上を打ち欠いて棺身とし、逆位の6を上からかぶせて合わせ蓋としていた。打ち欠き孔の直径は約17cmを測る。収納された遺体の大きさが窺えよう。土器棺は垂直に対して40°程度の傾きを有し、斜位に据えられていた。主軸方位は北北東である。出土状態を記録した図や写真を見ると、この土器棺は長い年月が経過していたにもかかわらず潰れずに埋設当時の形態をよくとどめていることがわかる。埋設にあたって棺内に土壌を詰めていた可能性を指摘できる。

棺身に用いられた7は、頸部より上を打ち欠かれてはいるが、受口状口縁の太頸壺と推定され、胴下半を横方向の櫛による条痕で調整している。器形や施文から、瓜郷様式前半段階に比定される。

棺蓋に用いられた6は、無文の平底甕である。条痕の代わりに斜位のナデ調整が施され、瓜郷様式の甕としては後出的な要素を備えている。

この他にも5号土器棺伴出として取り上げ

られた土器がある。8と9の2点だ。棺の部材とするには小型で、土器棺墓に伴うものとも断定しえないが、両者とも7と同時期の瓜郷様式前半段階の壺であり、土器棺の埋設時期が示唆される。

6号土器棺墓 C拡張区(5・6トレンチの拡張区)の6区で検出された。他の土器棺墓に比して深く掘り込まれたのだろうか、後世の破壊が少なく、土器棺の残存状況は良好だった。出土状態を記録した図や写真を見ると、棺身は横位の状態に寝かせた壺(10)で、主軸方位をほぼ真東に向けていた。胴部は土圧で潰れていたものの、打ち欠いた形跡はなく、開口部は認められない。遺体の収納は口縁部から行なわれたと考えてよいだろう。頸部の内径は15cm程度で、収納物が小振りであったことは間違いない。新生児や乳児などを収めるに十分な容量を備えているが、この土器棺が再葬用の壺棺であった可能性も考えておく必要があるだろう。

棺身に用いられた土器は、受口状口縁の太頸壺(10)だ。体部下半に横方向の櫛条痕が施されている。瓜郷様式中頃の所産と推定される。

11は、6号土器棺伴出として10と共に出土したとされる高坏の破片である。土器棺墓に伴うものと断定することはできないが、とりあえず本稿では、棺身の埋設に伴った土器片の可能性を指摘しておく。

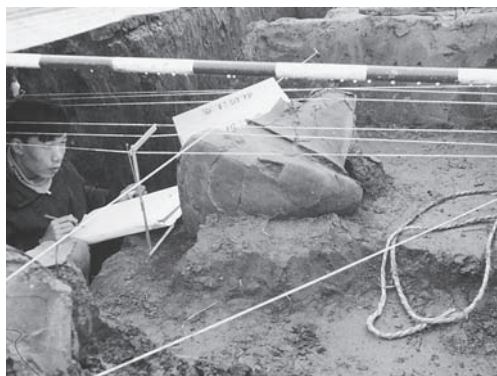
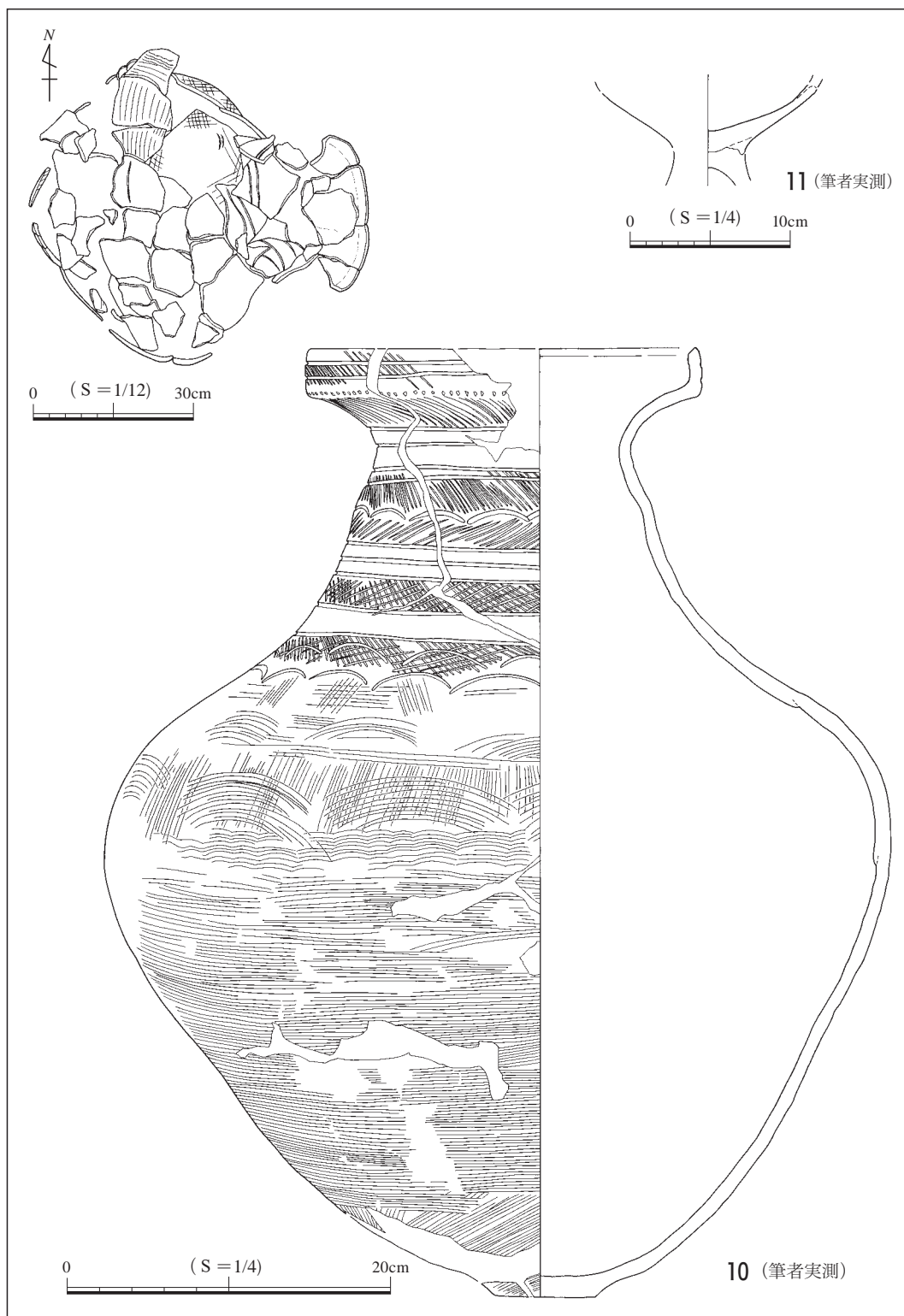


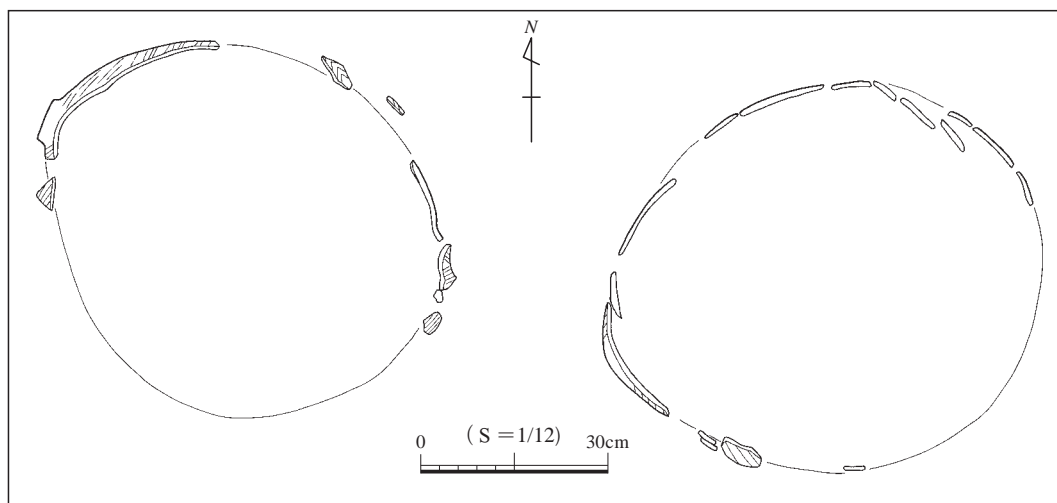
写真5 5号土器棺出土状況
撮影および写真提供：岩野見司氏



写真6 6号土器棺出土状況
撮影および写真提供：岩野見司氏

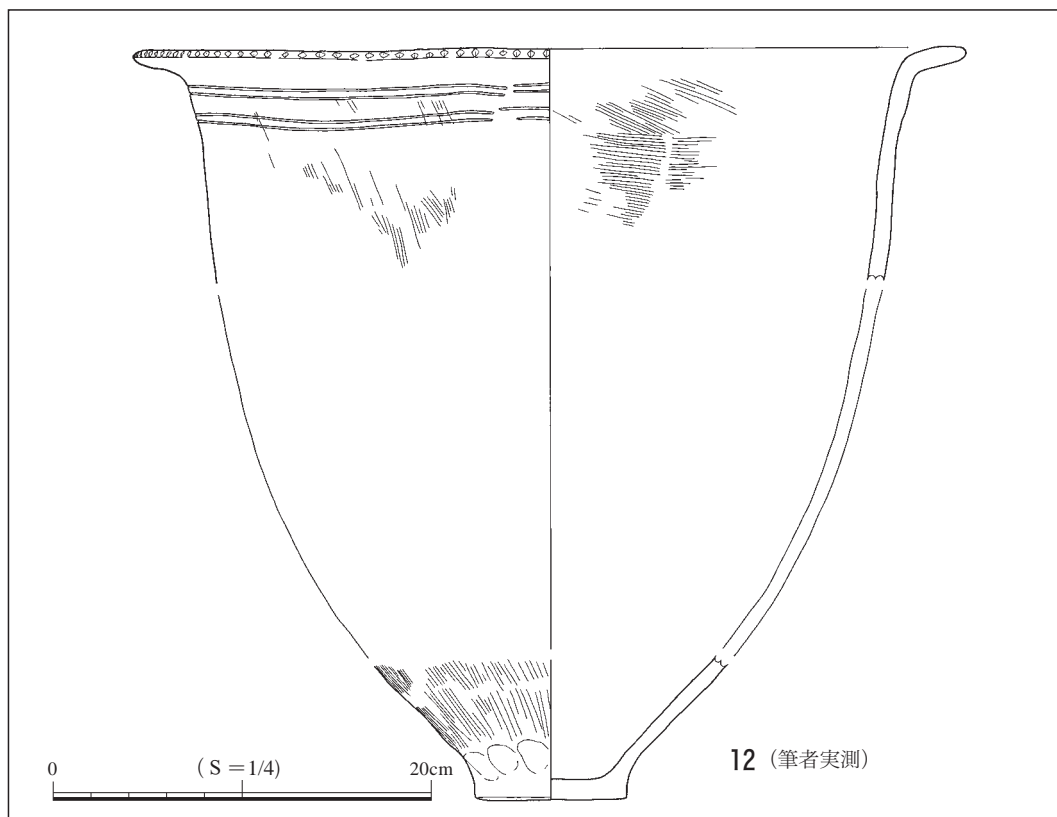


第15図 6号土器棺出土状態図および実測図

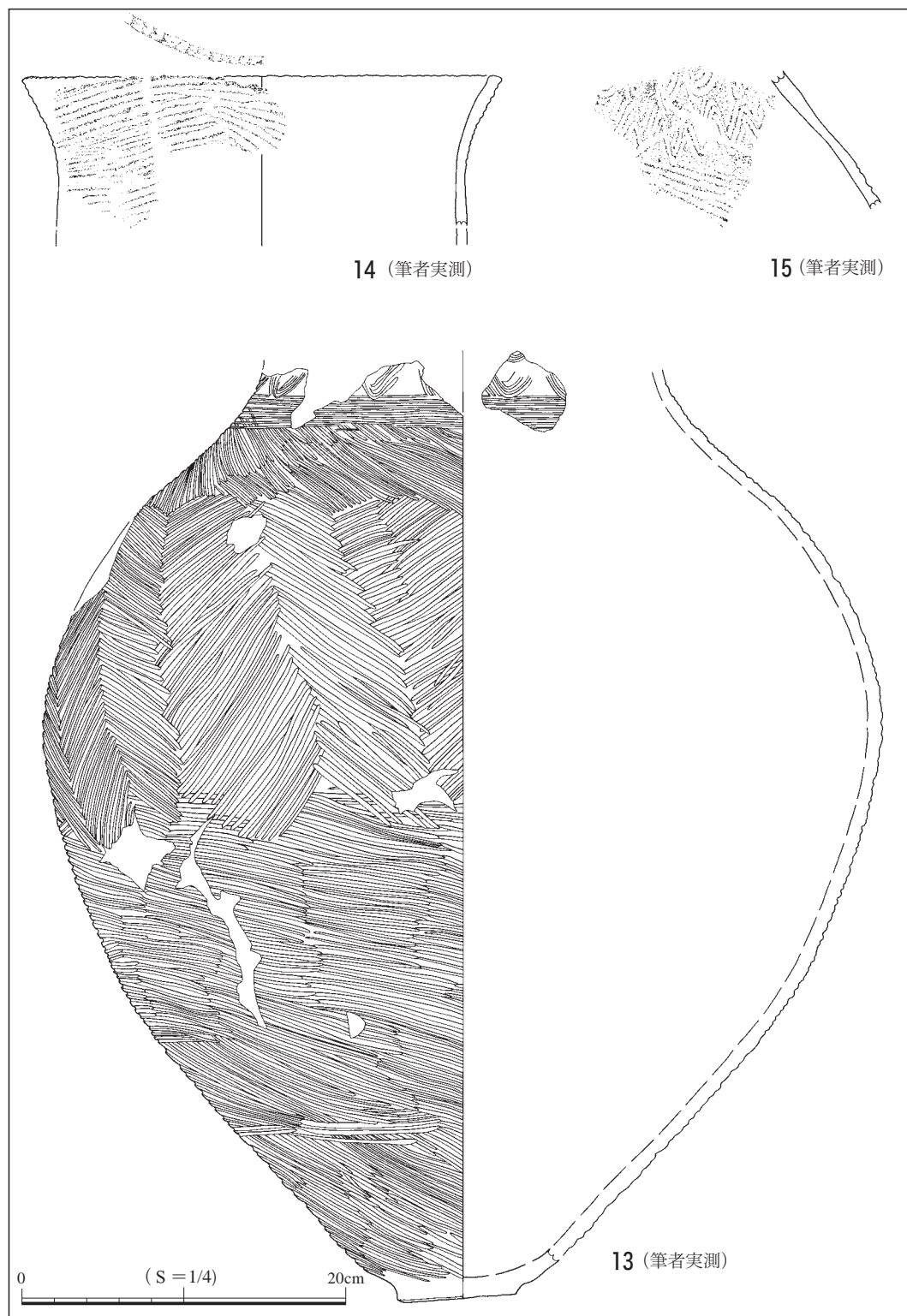


第16図 7号土器棺・8号土器棺出土状態図

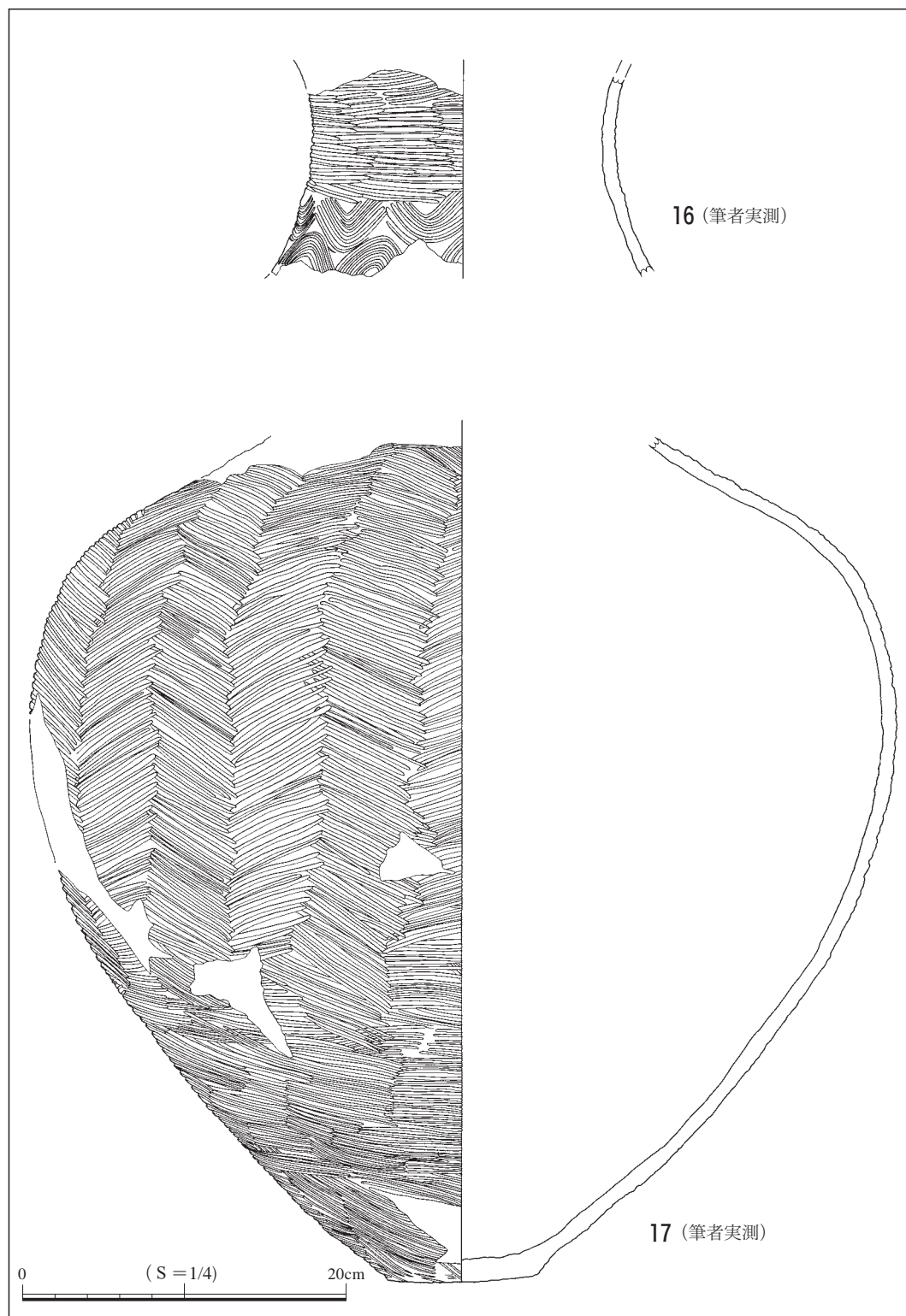
左が7号土器棺、右が8号土器棺。



第17図 7号土器棺伴出土器実測図



第18図 7号土器棺実測図



第19図 8号土器棺実測図

7号土器棺墓 D拡張区（7トレンチの拡張区）の2区で検出された。8号土器棺と隣り合うように東西に並ぶ位置関係である。後世の削平により土器棺墓の遺構の上部は欠損していた。出土状態図や土器棺の欠損状態から、棺身の埋設は横位で、主軸方位を東南東に向けて据えられたものと推測される。

棺身に用いられた土器は、大型壺(13)である。胴上半に縦位羽状条痕を施し、頸部文様帯との間に斜条痕を施す。頸部文様帯は横位直線文と波状文からなり、波状文帯は2条以上を数えることができる。弥生時代前期末（水神平様式新段階）の所産と考えられる。なお、この壺はかつて図化されたことがあるが⁽⁹⁾、所掲の図は、今回筆者らが再実測を行なったものである。

さらに、13の他にも7号土器棺伴出として取り上げられた土器がある。12・14・15の3点だ。

12は金剛坂式（亜流の遠賀川式）の甕である。口縁部は逆L字状に折れ曲がり、頸部には2条1単位の沈線文が2単位4条施される。比較的大振りな土器片であることから、棺身の開口部を閉塞するのに用いられた可能性が考えられる。

14は口縁部が外反する条痕甕である。口縁端部に押引文を施し、口縁直下から縦位羽状条痕で調整する。弥生時代前期末（水神平様式新段階）の所産と推定される。

15は頸部に波状文を施す条痕壺の破片であり、やはり弥生時代前期末（水神平様式新段階）の所産と考えられる。

8号土器棺墓 D拡張区（7トレンチの拡張区）の2区と3区に跨って検出された。7号土器棺と隣り合うように東西に並ぶ位置関係だ。後世の削平により土器棺墓の遺構の上部は欠損していた。土器棺の欠損状態から、棺身の埋設は横位に近い斜位の状態だったと推察される。出土状態図から、主軸方位を東北東に向けて据えられたものと推測される。

棺身に用いられた土器は、大型壺(17)である。胴部上半に縦位羽状条痕を、胴部下半に単斜向条痕を施す。弥生時代前期末（水神平様式新段階）の所産と推定される。

なお、大型壺の頸部破片(16)は、17の接合を進めていく過程で復元できたものだ。ゆえに、16と17は同一個体となる可能性もあるが、接合箇所がないことなどを考慮して、本稿では別個体として実測図を掲げている。16の頸部は連弧状の波状文2条以上の波状文帯で飾られ、17と同じく弥生時代前期末（水神平様式新段階）の所産と考えられる。

7. 結びにかえて

小括 本稿では、1965年（昭和40年）に実施された河原田遺跡の発掘調査について、第4章・第5章で調査経緯などの概要を報告するとともに、第6章では土器棺墓にかかわる事実記載を行なった。

調査成果のうち、本稿で明らかにできたのは次の点である。①土器棺の埋設形態には、立位埋葬・斜位埋葬・横位埋葬があること、②斜位および横位埋葬の場合、棺身の主軸方向は一定でないが、東に偏る傾向が見られること、③土器棺墓に使用されている土器には時期差があり、比較的長期間にわたって墓域が形成されていたこと、④遺構として確認されたのは土器棺墓だけであり、住居跡等は検出されていないこと。

これらのことから、河原田遺跡は居住域とは分離した墓域のようにも見える。

しかし一方で、第5章で引用した調査日誌の記述から、打製石斧や石庖丁など、居住域の存在を示すかのような遺物の出土を確認することもできた。河原田遺跡においても、居住域が墓域に近接あるいは重複して存在していた可能性がある。今後、同遺跡の資料整理を継続していく上で留意しておく必要があるだろう。

謝辞 以上、忽卒の間にまとめたため、不十分な点を挙げればきりが無いが、スタッフ一同が頑張り、筆者も仕事の合間を縫って、なんとか原稿をまとめた。甚だ拙い内容ではあるが、本稿をなすことができたのも次の皆様に御協力をいただいたからに他ならない。ここに御芳名を掲げて感謝の意を表する。

岩野見司氏、印南敏秀氏、鈴木とよ江氏、前田清彦氏、三島一信氏、水谷令子氏、山口恵里子氏、山田邦明氏、愛知県史編さん室、安城市歴史博物館

とりわけ、鈴木とよ江氏・前田清彦氏には貴重な時間を割いて筆者の面倒を見ていただき、細部にわたるまで懇切丁寧な御指導を賜った。ありがとうございました。

最後に、河原田遺跡の発掘調査を遂行し、多くの資料を愛知大学に残してくださった大参義一氏と歌川学氏の御霊前に心からの感謝とこの小文を捧げ、本稿の筆を擱く。

註

- (1) 郷土研本棟の背後（かつて陸軍の将校集会所だった郷土研本棟の裏庭にあたる位置）に建つ。旧陸軍時代の建物。
- (2) 1965年（昭和40年）11月27日付け、中日新聞三河版。「珍しいかめ棺群を発掘」、「弥生前期の貴重な資料」などの見出しにより紙面に大きく取り上げられている。
- (3) ここに記したのは、調査当時の地番であり、現行の地番表示とは異なる。
- (4) 大参義一（1970）「愛知県御津町河原田遺跡」日本考古学協会編『日本考古学年報18』p. 140
- (5) 愛知大学考古学研究会（1966）『高師考古1』p. 7
- (6) 註(5)文献 pp. 5-11
- (7) 註(2)参照。
- (8) 加藤安信（2003）「河原田遺跡」愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』pp. 604-607
- (9) 小林久彦（1985）「11. 河原田遺跡」愛知考古学談話会編『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題—縄文から弥生— 資料編 I』p. 92



写真7 2号土器棺伴出土器



写真8 2号土器棺（棺身）



写真9 3号土器棺（棺蓋）



写真10 3号土器棺（棺身）



写真11 4号土器棺



写真15 7号土器棺伴出土器



写真12 5号土器棺（棺蓋）



写真16 7号土器棺（棺身）



写真13 5号土器棺（棺身）



写真17 8号土器棺伴出土器



写真14 6号土器棺（棺身）



写真18 8号土器棺（棺身）

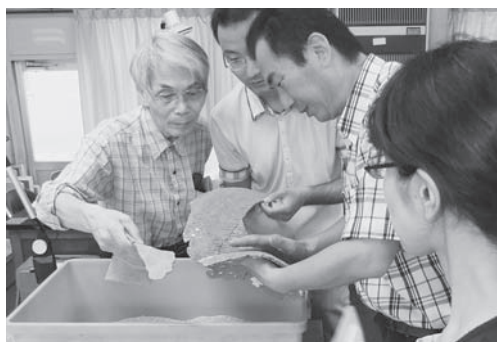


写真19・20 整理作業の様子（前田清彦氏を招聘して）

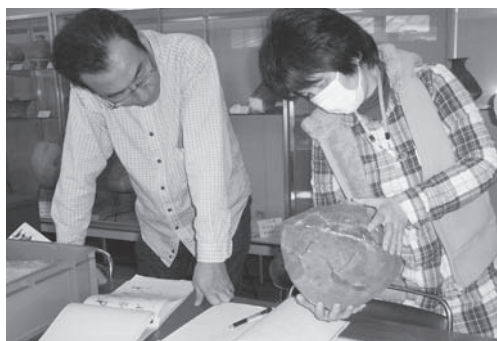


写真21・22 整理作業の様子（前田清彦氏・鈴木とよ江氏を招聘して）



写真23・24 整理作業の様子（岩野見司氏を招聘して）



写真25 大参義一氏遺品資料の調査

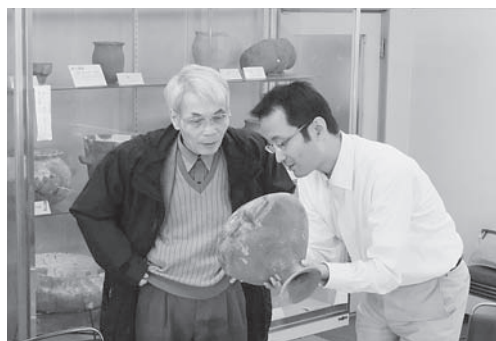


写真26 整理作業の様子